



ぷらっとシネマ アフリカの村の輝きと、憂鬱な確信『ムーラーデ』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15455

アフリカの村の輝きと、憂鬱な確信——『ムーラーデ』

萩原弘子

10歳にもならない少女が4人、コレのもとに駆けこんできた。村はずれの森のなかで行なわれている成人合宿から、割礼されたくないと逃げだしてきた子どもたちだ。コレは、幼少時に受けた割礼のせいで出産障害を経験していたので、自分の娘には割礼を受けさせていない。そのコレに、4人が割礼からのムーラーデ（保護）を求めてきたのだ。コレは家の入り口に一本の縄を張り、ムーラーデを宣言する。宣言した本人が終了を決めるまで、ムーラーデは効力をもつ。村長といえども無効にする権限はない。

ムーラーデは尊重されながらも、コレのふるまいは村の秩序を乱すものとみなされる。村の実力者男性たちは苦々しい思いでいる。女たちは、コレを支持する者、しない者、ただ遠巻きに静観する者、いろいろである。森では合宿が続いている。実は逃げだした少女は6人いた。コレに保護を求めたのが4人。行方がわからなかった2人が、井戸の底から帰らぬ姿で見つかる。また、割礼を受けた少女のひとり、術後の回復がうまくいかず、死んでしまう。コレに批判的だった村の女たちが、だんだんと変わってくる。

女たちの変化に、男性実力者たちが不安を覚えはじめたところに、コレの夫が出張から帰ってくる。自分の妻も管理できない駄目な男だとして彼を激しくなじった兄は、妻を教育せよと鞭を渡す。村の広場で衆人環視のなか、夫がコレを鞭打つ。くじけないコレを支持する女たちから割礼反対の声があがる。

アフリカ映画の巨星ウスマン・センベヌが81歳で監督した作品は、現代西アフリカの村の生活を活写した力作である。登場人物は生活感にあふれて個性的であり、女たちの労働が支える村の生活はリアルだ。そして、割礼とムーラーデをめぐって議論を交わす女たちの、掛け値なしの知性の輝き。センベヌは、村の女たちにアフリカの未来を見ている。

しかし私には、この作品は、西洋世界でも日本でもきつと誤解されるだろうという憂鬱な確信がある。「残酷な習慣に反対する女たちが現地にもいる、だから私たちがする割礼反対の主張は正しい」——割礼習慣をもたない社会のフェミニストのなかに、こう考える者は少なくないだろう。し

かしこれを見て、「割礼（女性性器切除）という暴力に反対する」正義と、その正義に立つ「同じ女」としての連帯を確認して悦に入るなら、作品の最重要部分を見落とすことになる。

これは、この習慣が西洋世界でどう論じられてきたかをいやというほど知るセンベヌが、割礼についての議論を西洋からアフリカにとり戻そうという映画である。かつては植民地宗主国が躍起になって廃止を唱え、この25年間は西洋フェミニズムが暴力として批判してきた女性割礼を、センベヌは西洋の手から引き離して、アフリカの村の生活のただなかに埋め戻している。むろんセンベヌはこの習慣に賛成していない。家父長制にも批判的だ。しかし、ここで村の女たちはただ男に服従するだけの犠牲者ではない。少女たちにも自分の意見がある。日々の労働で村を支えているのは女であり、それだけに堂々としてもいる。異論を唱える者を保護するムーラーデという、公正な社会制度があり、割礼はただ強制されるものではない。他方で、村の生活を理想化することなく、村の政治が男たちの手に握られている現実も描いている。劇映画であるにもかかわらず、割礼・反対の立場から製作されたどのドキュメンタリー映画よりもリアルである。そして食って寝るリアルな生活の一部である割礼を、やめようとする闘いもまた、リアルな生活の一部である。

男たちが、ラジオこそは女たちを煽動する外来の悪しき情報源だと見て村中のラジオを燃やすシーンがある。センベヌは、その時代錯誤を批判して、ラジオ（＝西洋文明）の側に軍配を挙げようというのではない。女たちが聴いているのは地元局の放送だ。批判は、男たちがする「ラジオ＝西洋文明」という図式化に向けられている。またセンベヌは、西洋がアフリカの野蛮の典型として批判してきた一夫多妻制を「問題」と見ることをきっぱりと拒否している。妻たちは協力して働く同志であり、夫とよりも強い絆で結ばれている。こうして西洋（および日本）の期待を裏切り、野蛮、伝統、未開のアフリカ像に抵抗しようというセンベヌの作品にまで、おのが正義を確認する西洋（および日本）の野蛮は、どうしたら克服できるだろうか。

(2004年 120分)